別記様式第４号

2020 年度 独創的研究助成費 実績報告書

２０２１年３月３１日

<table>
<tr><td>報　告　者</td><td>学科名</td><td>看護学科</td><td>職 名</td><td>助教</td><td>氏 名</td><td>井上かおり</td></tr>
<tr><td>研 究 課 題</td><td colspan="6">長期療養高齢者の緩和ケアに関する研究</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研 究 組 織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所 属 ・ 職</td><td>専 門 分 野</td><td>役　割　分　担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>井上かおり</td><td colspan="2">看護学科・助教</td><td>老年看護</td><td>調査実施・分析・考察・成果発表</td></tr>
<tr><td>分担</td><td>實金栄</td><td colspan="2">看護学科・准教授</td><td>老年看護</td><td>分析・考察</td></tr>
<tr><td>研究実績の概要</td><td colspan="6">

【研究背景】

日本では、緩和ケアは、がん医療の中で発展してきた経緯があるために、非がん疾患への緩和ケアは諸外国に比べ立ち遅れている。特に、高齢者においては、認知機能等の低下により適切に表現されない苦痛を特定することや、複数の疾患を抱える患者の予後を予測するといった難しさがあることから、緩和ケアが行き届いていないことが指摘されており、高齢者のための緩和ケアの開発が必要であるといわれている。とりわけ長期療養高齢者においては、認知機能の低下や意識障害等により苦痛を適切に表現できない場合が多い.。疾患に伴う苦痛のみならず、老いや療養に伴う多様な苦痛を抱えており、長期療養高齢者に特有の苦痛に焦点を当てた緩和ケアの開発が必要である.。

【研究目的】

本研究では、長期療養高齢者に緩和ケアを提供するための指針を開発するための基礎資料を得ることをねらいに下記 2 点を目的とした。

１． 長期療養高齢者が抱える苦痛の概念分析を行う。すなわち、概念分析の手法を用い、「長期療養高齢者の苦痛」の概念の先行要件、定義属性、帰結を明らかにする。

２． 看護師が捉える長期療養高齢者の苦痛を明らかにする。

【研究方法】

<u>研究目的１：</u>文献検討（概念分析）

医学中央雑誌、CINAHL、PUBMED、ハンドサーチより抽出した長期療養高齢者の苦痛に

関連する 12 文献から、Walker and Avant の概念分析の手法を用い、「長期療養高齢者の苦痛」の定義属性、先行要件、帰結を明らかにした。

<u>研究目的２：</u>インタビュー調査

岡山県内の医療療養病棟に勤務する看護師 16 名を対象としたインタビュー調査を実施した。分析は、音声データから逐語録を作成し、長期療養高齢者の苦痛について、質的帰納的分析を実施した。倫理的配慮として、本学倫理審査委員会の承認を受けた後に実施した（受付番号：19 - 72）。

</td></tr>
</table>

※ 次ページに続く

研究実績の概要	**【結果】** 研究１（概念分析の結果） 　長期療養高齢者の苦痛の定義属性として、【１．身体的苦痛（pain）と苦しみ（suffering）が密接に関連している】【２．独自の体験である】【３．絶え間なく持続する】【４．日常生活に影響を及ぼす】【５．医療者の苦痛と苦痛緩和への認識の影響を受ける】【６．沈黙の中で苦しんでいる】【７．存在が脅かされる】といった７つのカテゴリーが明らかとなった。先行要件として、【１．日常生活の喪失を伴う機能低下】【２．医療者の高齢者及び高齢者の苦痛への認識の欠如】【３．医療者の不適切な対応】【４、患者の否定的な認識】の４カテゴリーが明らかとなった。帰結として、【１．苦しみ（suffering）の増強】【２．身体的苦痛（pain）の増強】【３．生活の質の低下】の３カテゴリーが明らかとなった。 研究２（長期療養高齢者の苦痛を明らかにするためのインタビュー調査） 　長期療養高齢者の苦痛として、【１．病気の進行や機能低下に伴う身体的苦痛（pain）】【２．ケアに伴う身体的苦痛（pain）】【３．自力で体を動かすことができない苦しみ（suffering）】【４．尊厳を無視したケアを提供されることによる苦痛（suffering）】【５．ニーズを理解してもらえない苦痛（suffering）】【６．療養する環境を選択できない苦痛（suffering）】【７．見通しが立たない（suffering）】の７カテゴリーが明らかとなった。 今後、研究１および２の結果を精選し、論文作成の予定である。
成果資料目録	